

# 蘇芳集

笹 鳴

八木下 末黒

独 活 青山 丈

飴玉の紙を丸めて一葉忌  
藪巻を離れて少しぶらぶらす  
人影と植木と並ぶ植木市  
地下鉄に乗る前に見た冬桜  
改札でぴつと鳴らして初電車  
反対が先に来て出る初電車  
そのままの長さの独活を提げてくる

鉢植のつぼみほころぶ去年今年  
昭和 白寿 令和 六年 大旦  
松過ぎの南天こぼれ逝き給ふ  
生涯を働き尽くし寒に逝く  
蕎麦殻の枕に寝落つ枯木宿  
笹鳴やみたらしだんご照りのよく  
川甚の小さくなつて水温む

蘆を焼く

吉田 幸敏

初夢をとんぼを切つて出でしまふ  
ファゴットの息をゆつたり継ぐ七日  
それとなくあればすなはち寒卵  
ファスナーの素直に走る寒の明  
寺の名が町の名梅の開きけり  
これが武蔵野蒼穹に大冬木  
蘆を焼く比良も比叡も目覚むる頃

初 夢

小川美知子

初夢の中みんなるて皆居ない  
延命寺橋夷堂橋日脚伸ぶ  
日の当たる冬木の横を通りけり  
一人用ベンチが二つ冬たんぽぽ  
寒き日のティッシュ配りの後ろ通る  
鳩がつつく枯野の音を聞くとなく  
春近しほほ満月でありにけり

鳥 総 松

川上昌子

あぢさみの花の盛りのまま枯れぬ  
彼の熊を眠らせ山の眠りけり  
山暮るる湖暮るる明日冬至  
御降りをずうつと聞いてゐる湯舟  
玄関へ階段四つ鳥総松  
封筒に覗き窓春遠からじ  
電子レンジ光りて廻る春隣

あることの

木内憲子

一陽来復けふよりの鳥のこゑ  
三つほどがよろし水辺の雪ぼたる  
黙考の形もて連ね冬木立  
冬夕焼滅びの赫さかもしれぬ  
通るたび冬草を踏むころかな  
寒さきはめてオリオンの完結す  
あることの一部始終を寒夜かな

成人の日

清水裕子

立春のひかり背に花購ひに  
ほそぼそと国旗掲揚初御空  
早口が押し寄せてくる成人日  
音読のこゑに張りあり寒椿  
頁繰る手許の冬日漱石忌  
竜の玉弾ます遊び心かな  
冬木より天空近く寝まるなり

切 干 下平直子

淑氣いま巖打ちては波光り  
わづかなる御降りに松匂ひけり  
七日粥吹き窪ませて夫癒えぬ  
着ぶくれて町の噂に疎くをり  
振り洗ふ冬菜の青き水しぶき  
湯たんぽを抱けば母看し日々のこと  
切干を干しこの先もこの暮らし

十二月八日 富田正吉

佗助の身近にありし海の音  
米嚙んで水嚙む十二月八日  
返り咲くものが夢にも現にも  
大冬木鳥放ちては鳥を呼ぶ  
善良な顔の揃ひし日向ほこ  
湯上りのやうな日ざしや寒椿  
人の世の素顔のやうな寒椿

森は森 野路斉子

啓蟄の森小さくも森は森  
足腰を鍛ふる堇摘む為に  
上天気春の日傘か干し傘か  
門柱を攻めて椿の賑やかな  
春愁の出来て俳句のやうなもの  
春燈の二十五階が最上階  
階の灯の色のいろいろ暖かな

人 日 別府 優

初明り家事をまはせる半世紀  
初縫の灯を近く角合はすなり  
人日の顔のかたちを洗ひけり  
常磐木の葉照り一塊成人日  
寒梅の蕾の向きを据ゑにけり  
行く末の粗方見ゆる冬の梅  
合宿の荷をかたはらの葉喰

促そく

前田 陶代子

初

峰岸 よし子

はればれと十一月の飛鳥山  
冬滝の勢へる水の匂ひかな  
いちまいの空が水面に神迎  
鳴き合うて鴨の日向となりけり  
枯を深めて一水の向う側  
雲影の促そく蓮枯れはじめ  
文字書きて手帳ふくらむ夜の枯

去年今年

松原 ふみ子

去年今年船笛はいま空に満ち  
大川の入り潮急ぐ初景色  
石段の仰ぐ高さや初詣  
初夢や旅のアクセル踏むことも  
薺打つわが世限りの囃し唄  
夕風の運ぶ海の香松納  
戎笹都大路の日に翳し

宝 舟

宮尾 直美

常の日はじまつてゐる初曆  
黒をもてひかりとなせり初鴉  
初夢を忘れ果てたる昼の月  
着ぶくれて晴れ着の群に遠くをり  
即答をさけゆつくりと手套嵌む  
寒紅に胸中の火をともしたる  
大寒のあをあをと竹ひびくなり

まだ誰も通らぬ道の淑気かな  
七十路に夢の有り無し宝舟  
鳶の輪の高々とある三日かな  
一塔の影の重たき寒の水  
臘梅の香にゐて遠き人ばかり  
天辺といふさみしさの冬の鴟  
凧に運ばれてゆく柩かな